

2020.11.19

バイリンガル・マルチリンガル(BM)子ども相談室
第3回ミニ勉強会

2020年8月1日(土)10時00分～11時30分

早稲田奉仕園 リバティールームより配信

現地スタッフ:鈴木、高橋、奥村、東谷

講師:北洋輔氏

ZOOMでの参加者:応募49名中、47名が出席

真如苑からの助成金を受けて開催

<講演>

タイトル:「幼児期の子どもの読み書き基礎能力のアセスメントと力を伸ばすための働きかけ——2019年度BMCN研究会の続き——」

講師:北洋輔氏

講師紹介:国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 知的・発達障害研究部 発達機能研究室室長、ヘルシンキ大学医学部客員研究員、教育学博士、臨床発達心理士・特別支援教育士スーパーバイザー。臨床業務として、病院・園・学校を中心に発達障害のある子ども・大人の心理評価、指導支援および保護者の対応。園や小学校などの先生方へ、気になる子についての助言。

【著書】・『発達障害の心理学』(執筆・編者:福村出版 近日刊)・『顕在化しにくい発達障害の早期発見と支援に向けて』(分担執筆:日本発達障害学会)・『成長し衰退する脳』(分担執筆:新曜社)等。

紹介文: 昨年の研究会より早一年が経とうとしています。COVID-19の影響で皆さんの環境も大きく変わられたのではないかと思います。そんな中でも子どもたちへの指導は待たないに続けなければなりません。BMCN子どもネットでは多言語環境にいる子どもに関する相談室を開設しています。相談室が内部での勉強会を計画しています。第3回目の8月の勉強会に外部からの希望者20名を受け付けたいと思います。直前のお知らせですが参加ご希望の方はご連絡ください。希望者が多い時は抽選とさせていただきます。勉強会でお互いの疑問をぶつけあい学びあいましょう。

講演概要:

前半 読み書きの重要性、発達過程、つまずきリスクの早期発見と支援に当たった基本的な姿勢と具体的な方法についてお話頂いた。重要性に関しては、読み書きのつまずきが、国語のみならず一般的な学業不振を招きやすいこと、さらには不登校などの学校不適応を高率で招きやすいことが紹介された。読み書きの発達過程としては、日本語母語児ではひらがなの習得が就学前から始まっており、文字学習が未開始でも読める幼児が大半であるという、講師自身の研究結果が示された。また、小学校の学習過程もこのことを前提にしていることが指摘され、1年生の国語の教科書では冒頭から文字が使用されていること、1学期中にはひらがなの学習を終えて、読書や日記を書く等の活動までもが導入されることが紹介された。これらより、読み書きについては早めにリスク

のある子どもを見つけること、そのことが多言語環境下に育つ子どもの気づきにもなることが指摘された。

読み書きにつまずくリスクのある子どもの早期発見は、日々の関わりのなかでも可能であり、重要な観点として「①文字関心・②音韻意識・③聴覚短期記憶」の3つが提示された。5-6歳児では、文字を読むこと・書くことに関心がない(①)、言い間違いが多い(②)、ことばに合わせて手をたたいたり1歩ずつ歩いたりうまくできない(②)、歌の歌詞を覚えることに苦労する

(③)のいずれかに該当する場合、将来の読み書きリスクが想定される。そうした子どもを見つけた場合の基本的な支援としては、就学前～小学校で習い始めの場合は、文字を直接教えるのではなく、読み聞かせ、言葉遊び、カルタなどを通じて、上記①～③を育てていくことが推奨された。講師はこれを、「土壌を豊かにする」取り組みと述べていた。文字が少し入り始めた、読み

は覚えたがまだすらすら読めない段階の子どもに対しては、絵とひらがなの言葉を使った見本合わせ学習やフラッシュカード等の方法が紹介された。総括としては、読み書きにつまずいている子どもを見つけたときは、いきなり読み書きを教え込もうとするのではなく、一旦立ち止まってどの段階でつまずいているかを見極め、読み書き発達の道筋にあった支援を提供することが重要とのことであった。

後半 多言語環境にある子どもの、発達の問題をどのように捉え、評価するかについてお話頂いた。まず、事実としてモノリンガル環境でもマルチリンガル環境でも、生得的な背景を一因として、発達に問題がある児は一定数いることが紹介された。その上で、発達の評価では「知的」な問題の可能性を「根拠をもって」判断する必要があり、言語の問題・発達の問題という二値論ではなく、その子どもの全体的な発達のレベルを把握することが重要と述べられた。

その判断のスタートは、現場で子どもと関わる支援者の「なんとなく」の気づきであることが強調され、その「なんとなく」を形にする方法の1つとして、幼児の日常生活や集団活動における様々な行動が、おおむね何歳くらいでできるようになるかが紹介された。集団活動、子ども同士の関係、言語、認識、感情の5領域について、いくつかの年齢基準が示され(例. 3歳児の歯半分以上は「勝ち・負け」が分かる)、その子どもが現在できることが何歳位に相当するかの見当をつけることで、「知的」な問題の可能性について考えていく方法が紹介された。多言語環境にある子どもの発達の問題については、実態把握や解明が進んでいない部分が多くあるとしながらも、多言語環境が「原因」となって障害が生じることは否定されており、有病率の差も推測の域を脱しないことが示された。その一方で、子どもがもともと持っている弱さが、特定の環境では顕在化(重症化)することはあり得るとし、多言語環境が「過剰負荷」となる可能性も指摘された。従って、「言語か発達か」、「障害か否か」といった二値的な見方にとらわれるのではなく、子どもの発達の全体像を捉えること、さらには多言語環境に育つ子どもにとって何が一番大事かを考えていくことの重要性が強調された。

質疑応答の内容:

・読みの力を測るのに、文字だけの知識を測ると他の読みに必要な力は相関している(と)みて、それだけを測定して、知らない字は字をフォーカスして指導するというのでしょうか？
→音を判別する力、音を入れ替える力なども測ったが、将来の読みの力に対して一番予測力が高いのは文字の知識だった。読めるのが0文字のお子さんは、まだ文字を指導する準備ができていないが、読める字が20-30文字程度のお子さんは、読めない文字に対しても興味に向いているので、尋ねられた際などに知らない字を指導しても良い。

・お話は平仮名のことでしたが、片仮名、漢字にはそれぞれ別の道筋がありますか？ →平仮名と片仮名は同じ。漢字は、必ずしも音を表さない場合があるので別の道筋がある。

・文字の自動化の練習まで1ヶ月ぐらいとお話がありましたが、週何回とか、どの程度の支援の頻度を想定されているでしょうか？(毎日の日本語支援は難しいもので)？ →1日5分で、おおよそ20回の想定。フラッシュカードで読みの練習をするお子さんは、集中力があまり持たないことが多いので、1日は5-10分程度が妥当。できれば毎日家庭でも続けると良いが、難しければ1回5-10分×20セットを目安にすると良い。頻度については、1年に1-2回では、さすがに効果があるか分からないが、毎週1回か2回はやって、20セットをこなせると良いのではないかな。

・読み書きができなくても、【生き抜く】ことができるというのは、どういうことでしょうか？ 外国から来た子どもが、十分に日本語の読み書きができないまま、高校を卒業していくケースをたくさん見えています。日本社会で働いて行くには、読み書きが十分でない、働ける職種が限られてくることを危惧しています。【生き抜く】という意味はどういうことかを知りたいです？

→生き抜く＝死なないという意味で考えて頂きたい。日本語の社会では、読み書きができないと働ける職種が限られ、それは日本だけではない。より良い生活のためには、読み書きをした方が良いが、できなくても死ぬわけではない。ただ、学校で読み書きができないような状態で生活をすると、お子さんにとっては心理的な負担が非常に高い。そのような、心の面で辛い環境で6年間耐え忍ぶことは大丈夫か？そのことを皆さんに考えて頂きたかった。読み書きができなくても、卒業や大人になる事はできるが、その中でメンタルという点ではかなり辛いものがある。そのことを伝えたかった。

・質問の生徒は中1来日、高校1年で他県から転入してきました。漢字、単語の取得は小学校中学年ですが、低学年レベルの国語教科書でことばのまとまりでは読めず、逐語読みのレベルでした。それでも通ってきたのですが、高校授業は殆ど耳のみの参加であったろうと想像します。こういう生徒に、いますぐ彼の気持ちを汲んだ指導方針をお聞きしたい。

→高校生なので、このお子さんが何をしたいかを、私なら聞く。このくらいだと、自分の苦手さやまとまり読みができていないことは分かる。それでも、頑張りたいという気持ちがあるなら、大学に行って日本語の読み書きをするような仕事に就きたいのであれば、それを目標に指導をするべきだし、日本語は会話程度で良いなら「話す・聞く」の指導を中心にする。高校の授業もあるが、本人の希望も大切。私がこれまでに見てきた子どもでも、高校では読み書きを全くやらず、口頭試問でかなり高いレベルの学習をしてきたケースもある。

・カードなどを使った段階的な支援、とても参考になります。約1か月もすれば、出来るようになることでしたが、週1回の練習で、約1か月でしょうか？おおよその合計時間数を教えていただけると、助かります。

→こういったスペシャルな教育は通常週1回で、これが実はキーになるところ。宿題を入れるのも一案だが、それには家庭の協力が必要になる。週1回で20回だと5-6カ月になる。頻度については、1回前の時間にやったことができないのはよくあるが、1回前よりもできなくなっている(5-6回前のことを忘れてる)ならば、頻度としては足りないと思う。

・【英語の単語テストの成績が、読み上げやカナ回答によって向上した事例について】この子どもは、日本語でのやりとり(母語)では全く問題がない生徒でしょうか？日本語の読み書きも NP(No Problem)でしょうか？

→日本語は全く問題が無く、知的にはやや高めだった。偏差値で言うと 50-55 の間に相当するお子さん。日本語の読み書きにも問題がない。

・読み書きが苦手なのにも関わらず、知的な能力が高いということは、どのような能力で補っているのだと考えられますか？

→色々な力が考えられる。お子さんによって違う。「話す・聞く」、「見る」、「今まで獲得してきた経験をもとに、自分の知識として蓄えている」などで、読み書きを自分なりに補っている場合がある。

・日本語の読み書きはできても、アルファベットが苦手というのは、アルファベットという文字の持つ特性からでしょうか？

→はい。読み書きの問題で、世界で一番平和な言語は日本語で、一番危ない言語は英語。ひらがな、漢字は何とか通過してきたお子さんも、英語では困難が顕在化するお子さんが中学校でいる。英語は 1 文字 1 音対応ではない、文字の区切りが分からない。(困難があるお子さんで) 英単語を読み書きしている場合もあるが、写経と同じような状態になっていることもある。

(文責:奥村・高橋)

以上